

"jelneede"

『ソノヒノキ』

acp ed jpef, jpef ed hup, hup ed uep, jon
uel arcl aci. acp op sool jolel. se jel ef nce
lif aci sef se idm. up, ef scnlr lif se lmls nr.

白は青へ、青は赤へ、赤は黒へ変わり、そして闇が世界を覆った。1日はいつもと同じように終わろうとしていた。しかし世界にとって何でもないその日は、この少年にとっては非常に重要なものだった。

m nr delj lr sml lonf cnj rhaa. ncnr, m scl
nruep.

テラスにて、日没を見ながら私は悩んでいた。いや、憂えていた。

aclj drcn nozef lon lols dcjlel. jee m nr noj
lndej ife yen lenf. upn cnj mf clcpcej aup
hup yen uopidrcn. hnm se ef eel mf cd sep
lr. zil r, se en yen m.

心の中でここにいる私の体を眺めてみた。人形のように立っている自分が見て感じられた。この目は死人の目のように赤い光を映していた。そうか、これが今の私の顔か。不気味だな、私ではないかのようだ。

c sml, lifcl il ez. jlcnci r jlccl, cn drcf.

テラスを離れ、私は部屋に入った。椅子に座り、カレンダーを見る。

"rr..."

「ああ…」

lc leo, m lnd c jcl. upn hiljml r dolf.

そう呟くと私は椅子から立ち上がってベッドで仰向けに寝転んだ。

"pej rr, jol nr mf ef"

「ああ、腐ってるねえ、私の心は」

jcis scl ded l'm jccnr. fil m nr ued r loscl
nel se ed def r do mf, lcl se. seo, m en nr
ued r loscl nel do lcl ye fil r loscl nel dodyl
lcl ye, dm m cn pcy dlm f'epc.

天井には鏡が付いている。私はこれが好きだ。だが、もしこれが落ちてきて首を切られたらと考えると…怖い。いや、首が切られるのが怖いというより、頸動脈が切れるのが怖いのだ。鮮血が飛び散る様を見るのは嫌だ

"m lacj lnel jec..."

「私は生きてるのかねえ…」

leo de r noj lr se ez le ye se scl m lr.

自分に再度呟いた。私以外は誰も居ないこの部屋で。

neqel cnj. aup hup l'm nr op aup uep. m
nr ued dcl uel fil nr lcl nrl fm.

目を閉じた。私を感じている赤い光は黒い光へと変わっていく。闇のせいで怖くなった。が、同時に安心も感じ始めていた

lc aup hup leeu, m hocl cnj. cd se aonc,
m cnjcl eel mf lren ded.

赤い光が消えると私は目を開けた。すると、鏡の向こうに一瞬彼女の顔が見えた。

"hpep"

あれ？

se elj yel le eel lmf lr lml mf lols jon m
cncl lml nozef, fil hro, lr dc ife. upn cjl lr, pcb
scj lr.

ということはあの美しい顔が私の隣にいるのではないか？しかし隣を見るが、いるはずもなく、ただ蚊が居ただけだった。

"jocno"

「やあ」と声をかけると蚊は逃げ出した。途端に殺意が

jon ꝥcb ela lcf m. m jef li ed fə. fil fə elacl
m.

"beot"

m ꝥcncl de i ꝥcl, acꝥ didl.

"acꝥ nef..."

fə jel lənil de m. m ni nre enfo dclb um.
fm̄ m̄ fcl ucl. fo ꝥcl ꝥn ol lcl de fə ꝥec.
m ni hro ꝥc i. lcel m eni ꝥcl. m̄, il̄ ej m
ꝥof ꝥoi ꝥec. m fcl fə knoꝥ le nclm̄ m jef nōꝥ.

m ne hcꝥ. fil m ef il̄ i ꝥə. m ꝥil̄ ꝥen ncdcf
ifc fꝥ. jon m ed ucl am̄ i ac fꝥee. ilac, m
ef lecf ol enuc acn fə ef ucln ni.

fei m ne m, m broꝥ um m. m ef accd. ꝥee
m upre nōꝥ accd.

m ef il̄ i ꝥə d̄m m ef accd. fcl̄ m dcꝥə
ela fə fehn. fꝥꝥ, hm̄ accd lei ela fehn accd
d̄m lə ef accd, il̄d̄is ꝥi, il̄di, hꝥꝥ iden fcl̄n̄.

m en cnꝥ ed broꝥ, nefəl de cnꝥ. m nefəl
fəꝥdel, hōdc̄l ꝥəl ꝥeꝥdel.

fcꝥ"foil ꝥil̄ ꝥil̄beꝥ. oꝥ m il̄if li neede hm̄ ꝥec.
nccn, m fcc̄i ed li cd hm̄il̄"

m nif fo cd le jel ꝥec. fə if hro lōn tel m
il̄ li. hel, m fꝥꝥil̄ tel hm̄ lōn ꝥil̄beꝥ il̄ꝥ ncd.

m l̄il̄if le li ꝥil̄ fcl̄fo uelf am̄eden ꝥi m̄. lei
m jefil̄ li, jon m ne m cden fꝥꝥ.

m zccnif fcl̄fo, nif ncl̄ d̄m acm hm̄ fcl̄n̄ li
ifə. li l̄ol m if ꝥalc, fil li ꝥej hm̄ o am̄ o fꝥꝥ.

沸いた。が、逃げられてしまった。

「クソッ！」

私はもう一度椅子に座ると、カレンダーに目をやった。

「今日だ…」

またこの日がやってきた。とても嬉しくて踊りたくなるほどだ。

拳を見ると、手首に傷があった。また切ったらどうなるんだろうな。痛いだろうね。泣くかもしれないなあ。そもそも、何でこんなことしたんだろうなあ。この自問によって私は今まで生きてきたのだ。

劣等でもないのに何も上手くできない。何でもある程度はできてしまうので、情熱を注ぐということができないのだ。力ある無能力者だな、私は。そしてそれは矛盾的だ…。

もし私が他人だったら、こんな男、殴っているだろうな。だって私はただの怠け者なのだから。こんな自分は愛せない。

何にも上手くいかないのは私が怠けているからだ。なのに怠惰を直すことができない。怠け者は怠惰だから怠惰をも直そうとしない。始末におえないものだ。

拳を見るのをやめると、私は再び目を閉じた。現在を閉じ、未来を開いた。

「もう何年になるかな」と小声で呟いた。「あの美しい姫と会ったのはいつのことだったか。いずれにせよ、私は始めてあったときに彼女のことを愛してしまったのだよ」

あの日、私は何を考えていたのだろうか。彼女に出会うなどとは予想だにしていなかっただろう。似合わないジャケットを着て、何とはなしに外へ出たのだ。

そして家の近くの暗がり人が居るのに気が付いた。もし彼女を無視していたら私は今の私でなかっただろう。

暗がりを覗き込んだ私は驚いてしまった。というのも、とてつもなく美しい小さな少女がそこにいたからだ。彼

neede--m læf mɪ lɪ leɪ jɔɪ--lɪlɪf m, ɪjɛlɪf
ɪl m. lɪm ɪj nɔɔ lɪ ɪjɛl uɔl lɪmɪɪl jɔɪ nɪ.
m mɪlɪf ɪf lɪ leɪ ɸɛnɪl fɪl m nɪf neede eɪ ɔɪz
ɪ lɪ. m mɪlɪf lɪ leɪ ɪɓ lɔnɪf nɪ deɪj. ɸm lɪ ɔɸɛɪf
ɪl m enɪel.

lɪ ɪɔl nɔɪ ɔɔl jɛj. lɪ ɪɸɪfɛj ɪlɪ lɪɔ, nɔɔɪ ɔɔɸɸ,
lɛj enɸɛ ɔlen deɪj, ɔɔɪl ɸɛl ɔ ɔɔɸ lɪen ɔɪn.
ɪl, ɔɔɔl lɪɔ lɪen lɛj ɪf ɔɔɸɸ. ɔɔɔl ɪɔl ɪ ɔɔɪ ɸm
ɪɓɛj ɔɔɪ ɸɸɪfɛj ɪɔɔɔl lɪɪ.

neede lænɪf ɔɸɛɪ m. ɸm m ɔɸɪf uɔl nɔj.
ɪɔɪf"ɪɔ, nɔn ɪlɔɔl ɪɸɸ"
m lɔɔɔl uɔl eɪj e ɸɛnɪl læɪ. lɔɔɪ, m ɪɔɪf nɪɸɸɪ
ɔm læ ɔɔm eɪf ɪɔɔl ɸɪɪɔ. fɪl læ lɪɪf ɸɛɛ ɪl m.
ɪɔnɪ, m ɪlɪf ɸm læ ɔm m ɔɛɔɔl læ. ɪɔɔ, neede
ɪf lɪɪl m. mɪj en jɛɪf eɪj e ɪɔl ɪɔj fɪl nɪf nɔɔ.
ɸɪ, nɪf nɔɔ ɔm ɪɔɔ mɪj ɪf ɪɔl.

ɪɔ lɔnɔɔɪɔ, læ ɪɪɪɪf. ɔɔ ɪɓ, m nɪf læ leeu ɔɪl
m. fɪl m nɪf mɪj ɪl jɛn de ɪɔl ɔɔ le.

m hɔɔɔɔl ɔnɪ.
ɪɔ lɪɪɪf, m ɪl le neede ɔɔ ɪɓ jɛl fɪf ɪlɪ. lɪ
læf ɸɪf m jɛɸɸɸ. mɪj ɪɔɔɔ jɔɔ e ɔɛ ɪlɪ ɪ ɪɔl.
ɸm m ɪɔn lɪ eɪf ɔɔmɪ ɸɔɔl m ɪlɪ lɪ.
m nɪ nɔɔ ɔɔ lɪl ɪl ɪl lɪ ɔɔ ɔɔj. ɪɓ eɪf ɔm m
nɪ nɔɔ ɔ ɸɛɪ ɪ ɸɔɪf. m ɪɔɸ ɔɪjɛl nɔj lɔɔj
ɔɪl ɪz fɪf ɪlɪ.

ɪ lɪ leeu m ɔɔ lɪɪɪf, lɪ læf jɔɪ.
"ɔl ɪɸɸ en lɔɔj ɔɪl, jɔn nɔn ɔɔɪ ɔm ɪ ɪɸɸ ɸɔɔl

女も私と同じで子供だったが、美しく華麗で魅力的だった。

姫――と私は呼んでいるのだが――は私を見ると美しく微笑みかけてきた。天使の微笑みは美しいが天使でさえこのようには微笑めないだろう。

「嬢ちゃん」と呼ぼうとしたが、彼女があまりにも美しいので姫と呼ぶことにした。戸惑いながら彼女をそう呼ぶと、彼女はゆっくりと私に近づいてきた。

彼女は髪を長く伸ばしていた。桃色のシャツに薄青い色のセーター、フリルの付いたページのスカートの、頭につけた白玉のアクセサリー、とりわけスカートの大きなりボンが変わっていた。リボンには2本の紐が垂れており、彼女の鬘まで届いていた。

姫が私に近づいてきたが、私は身動きを取れなかった。「やっと見つけた、あなたを」

姫は始めに小声でそういった。全くわけがわからなかった。面倒なことになるのではと、不安な気持ちがよぎった。が、結局、姫は私に何も望まなかった。姫に一目惚れしてしまった私は彼女を助けてあげようと思ったが、姫は何も望まず、ただ私の隣に佇んでいただけだった。互いに名前さえ知らなかったが、私達は幸せだった。ただ一緒に居るだけで。

12 時を過ぎると彼女は立ち上がった。私は別れを悟ると共に、再会をも悟った。

私は目を開けた。
彼女にあって以来、私は毎年この日になると姫に会いに行く。彼女はいつも私を待っていてくれる。私達は会ってその年の出来事を語り合うのだ。そして彼女に会って自分と彼女の存在を確認するのだ。

今日も彼女に会うと考えると少し緊張する。緊張の半分は幸福で、残りの半分はしかし死の恐怖である。私は毎年彼女に会って、生きるべきか死ぬべきかを決めてきた。

初めて出会ったとき、別れ際に彼女はこういった。「貴方が生きるべきでないなら、次に会った時に私は静

uəpɪ ʒeɪp"

m en nɪ ʒɔɪ ued ɪ fə ʒenɪ sɪl ɔd fəp, fɔnɪl.
ɑɔɪ, m lɔel ʒef ɸə le ɔnɪ ɑɔɪ. m nɪl ʒɔɪ lɔel.

hɪɔ, m nɪ ued ɪ uəpɪ ɪlɑɔn m ʒesɪf ʒɪf nɔɪʒ
m ɪleɪɔl ɪ nɔɪ.

m ɪlf lɪl lɪ ʒɔlel, nɪ lɪl nɔl. sɪl ɔnɪ e neede
ʒel um ɪl m ʒec. m lɔbɔl eel lɔn lɪɪ. fəp,
neede ɔ uəpɪ eɪ lɔɪ ɪ deɪf.

ɸm lɪɔflecɔɪ ʒɪɪɔl ɪl m ɸəl uəpɪ lɔl neede
ef uɔll, ɸəl m nɔn neede ef uɔll.

fəo, fə ef fəo. m ʒɪɪ ʒɪf lɔfɔ, sɪl lə lɔɪ ɔnel.
"ɪlɪɔn eɪ fɔ scɸ uɔl nɔɪ ɪlf lɪ ɪz"

lɔn lɔu"m scɸ uɔl fə en ɔm m nɪ ued ɪ uəpɪ
sɪl ɔm neede sɪd m lel ueɪɪ ɔ ɸəɔɔlɪ"

hɪm, m nɪ ued ɪl en uəpɪ fef fə ɪ. m nɪf delɪ
ɔɔl fə lɪ. m lɪdɪ ɑɔel ɔnɪ enfel. ɸm ɔɸəɔl
lɪɪ ɔf eel. fə ef lɪnɪɪ. fə lɪnɪɪ hɔf ɔs ʒɔɪ
neede. ɔd ʒeɪ, m ɔsɪf ɔɔael nɔɪ e neede. m
ɔɪeɪ fə ʒɔn ɔɔnel ɪlɑɔn neede en lɪlɪf fə ʒɔn
ʒɔɪ.

m euɔl lɪnɪɪ ɪ lɔd. neede en lɪleɪ m nɪ delɪ
lɔl lɪ en lɪlɪf m ɔs nɔɪ lɪf nɪ.

m ʒɔɪ lɪ. hɪɸə m nɪ delɪ. m nɪ ued ɪ ʒef ɸə
ɔ ɸəɔc ɸə neede ɔɔl m ʒɔɪ lɪ. lɔ lɔɔl ɔlen
lɔfɔ, m lɪlɔl lə leueɪ m.

lə nɪf mɔc ɪ ɔɪɪ ʒecɔ ɪz lə bɪɪ eɔ ɔɪɪ ʒecɔ ɪz

寂な死を貴方に与えるでしょう」

今日までこの言葉を恐れたことはなかったが、今は恐ろしく怖い。今年こそあの美しい緑の瞳に殺されるかもしれないのだから。私は始めてそう感じた。

それにしても自殺を図ったものが死を恐れる？——私は自嘲した。

いつものように彼女に、姫に会いたい。そして幸せを感じたい。だが、姫の目は私に微笑みかけてくれるだろうか。私は顔を手で覆った。姫と死とが天秤にかけられていた。

すると私の中のもう一人の私が囁きかけてきた。姫は死と等価なのか。お前は姫を自分以上に愛することはできないのか——と。

否、断じて否。私はもう一人の私を追い払おうとしたが、奴は続ける。

ならばなぜ姫に会うかどうかを決めあぐねているのか——と。

「私は死が怖くて迷っているのではない。姫に生きる必要の無いくだらない人間だと定められるのが恐ろしいのだ！」

私は声を出して奴に答えた。そうか、私は死が怖いのではなく、それが怖かったのだな。そのことで私は悩んでいたのだな。私はゆっくりと長く息をついた。顔から手を離す。左手だ。この左手だけは姫に触れたことがある。以前、左手が姫の髪の毛に触れたことがあるのだ。私はそのことをよく覚えている。尤も、姫はそんなこと知る由もなかったろうが。

私は左手を頬にあてた。私が姫の髪に触れたことなど知らないのと同じで、姫は私が悩んでいることも知らないだろう。姫は何ひとつ知らないのだろう。だが、私は彼女を愛している。そしてそのことが私を悩ませているのだ。姫を愛せば愛すほど姫に殺されることが怖い、姫に否定されることが怖い。私ともう一人の私との言い合いが終わると、奴はいつのまにか消えていた。

奴は忠告に疲れたのか、その必要がなくなったのか、はたまたそれ以外か、いずれにせよ奴はもういない。い

ilf...8 nccn læ leeuej m. lill, læ leeuif m dm
m byj ed læ. m en lcp ed læ dm m scpcl
noj ilf le neede iz.

jllel, li læni non lc upzon. cd cljilf, sæ jel,
lc upzon... li jyel i non cd jilcl non jccni.
qm li lccf non llllo le cnj le non jccni.

non lillif sæ aci ef uepj ifc fcnfcn lill li cd
lillif. lcel, li seilf um sæ aci onf epn e uæadi.
non niof sæ uol cn cnj lmf. ficol li nif jeci cn.
jon non menjif joi.

"ol fye en lacj ail, jon non acf am i fye uel
uopf jepf"

li ni ela ued i uopf. iljon non jef jen li. hrc
li jep ej non jef jen li eyp. non jef jen li ldm
li fccr non non nm. li ilf læni non lonf ni delj
seæ nm llci jef uæ non. hrc sæ idci li fccr
non non nm. non fia jen jelej lmf uol jef dcl
li fccr non. cnj lmf ef il cd sæ jilf eyp. lmf, li
læni am non eyp.

ail ej hæa. lcel, non ufej ifæ.
non hel lcf wilcj lllben ifel lonf uif li.

m dypocl lmlly c lmd, neyæl cnj.
m ilf lil neede.
m jcy neede uelc m.
m ni jea dm jencj delj, scpej noj le um
iz.
m helej wilcj olen lol lol m jo cd cljilf.

や、私が奴を必要としなくなったから奴は消えたのだ。
なぜなら、私はもう行くかどうかを決めたからだ。

彼はいつも8時すぎに来る。毎年、この日の8時すぎ
に…。彼は私を見つけるとすぐに微笑みかけてくれる。
そして私の好きなあの瞳でもって私の心を魅了してくれ
る。

私は彼と初めて会ったときに、この世界が彼にとって
なんら魅力的でないものだということを知った。彼の目
を見て、私は彼がこの世界や他者を破滅させかねない
と感じた。そして彼は寂しそうだ。だから私は言った
のだ。

「貴方が生きるべきでないなら、次に会った時に私は静
寂な死を貴方に与えるでしょう」

——と。

彼は死を恐れないだろう。だから私は彼を殺すことが
できるのだ。私が彼を殺せる理由というのを彼は知って
いるのだろうか。彼が自分より私のことを愛してくれる
からこそ私は彼を殺せるのだ。私に殺されるかもしれない
と思いつつも私に会いに来てくれる。それは彼が自
分より私を愛してくれるということ。だからもし彼が愛
してくれれば彼をもっと愛し、彼を殺して彼の魂を得る
だろう。今年の彼の瞳はどのようなものだろう。そもそ
も来てくれるだろうか。

日が暮れていく。早く来すぎたのかもしれない。
彼を待ちながら、彼と私の思い出を思い出し始めた。

左手を頬から離すと、私は目を閉じた。

姫に会いたい。

姫に否定されたくない。

悩みを断ち切り、行くか否かを決めた私は平静さを感じ
ていた。

私は毎年するように、彼女と私との思い出を思い出して
いた。

--neede l'm ilf jen cd fa jel
m jen eni lien pod lon lij.
dof m, jel il m lmfel --jol jelneede l'm focci.

—その日に会うことができる姫

私は手で、左手で目頭の涙を拭った。

私の頭の中で、美しく微笑みかけてくれていた—私の愛するソノヒノキが。